

41219

教科書文庫

4
920
42-1966
25980
05911

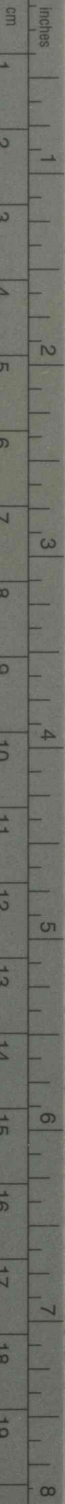
442
112

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

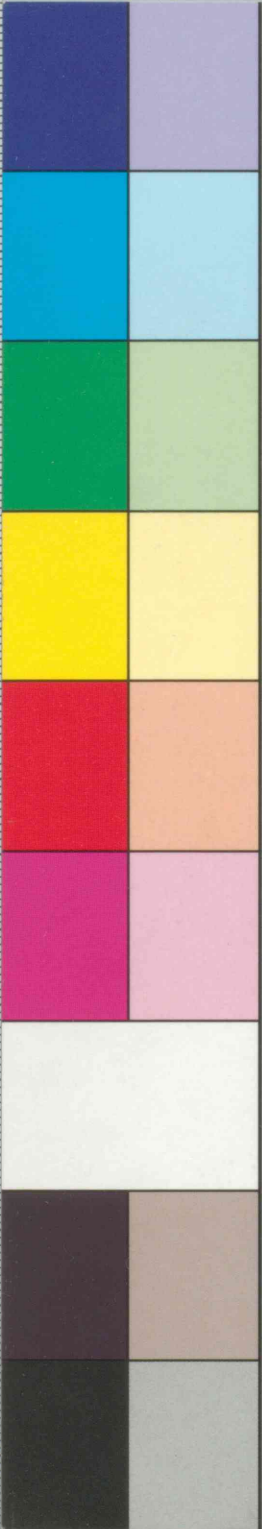
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



593 類
91 號

編物教科書

森本義子著

全



明治三十三年四月九日
文部省檢定濟

類 593

号 91

No. 5911



編物教科書

野口保興先生序
森本義子著

東京 森本藏版



第 5911 號

之ヲ理論ニ徴シテ明カニ之ヲ實際ニ施
シテ謬ラザルハ普通教育ノ精神ナリ夫
ノ技藝的教科ニ課スルニ圖書裁縫刺繡
編物等ヲ以テシタルハ蓋シ美育涵養ノ
特ニ女子ニ必要ナルニ基ヅケルモノナ
ランカ然ルニ從來刺繡裁縫及編物ニ就
テハ研究ノ法未ダ備ハラズ况ンヤ發展
ノ途ヲヤ故ヲ以テ往々該科ノ趣旨ヲ誤

二
解シテ其ノ實用的手藝タリ養美的技能
タルヲモ忘棄シ徒ラニ無用ノ製作ニ趨
ルノ弊アルヲ見ルハ識者ノ大ニ憂フル
所ナリ

森本氏ハ編物ニ於ケル先進ナリ頃日積
年ノ經驗ニヨリ其ノ蘊蓄スル所ヲ纂メ
テ一篇トナシ編物教科書ト名ヅケ余ニ
示シ序ヲ求ム秩序整然説明簡約而シテ

理論ニ正シ實用ニ稽ヘ美育養成ノ本旨
ニ副フモノト云フベク頗ル余ノ意ニ恰
當セリ即チ信ズ技藝的教育ヲ受ケント
スルモノ、爲メ本書ガ如何ニ好個ノ良
師友タランコトヲ記シテ以テ序ニ代ヘ
併セテ世ニ紹介ス

明治三十八年一月

野口保興識

編物教科書

緒言

一近來女子教育の進歩發達に伴ひ各地競ふて高等女學校女子美術學校或は技藝學校等日に月に増設せらるゝは要するに世の女子をして必要缺くべからざる諸般の學藝を習得研磨せしむるの目的に外ならざるべし、然れば女子の特性長所とも云ふべき技藝にして科すべきもの亦た少なしとせず、就中編物の業わざの如きは女子に最も適當の手藝なる事は世の遍ねく知る所なり、一綾すぢの絲と一個の針を以て僅に増減の二義を應用し其の變化に因りて諸般の物を作製し得るのみならず爾しかも優美高尚に

て且つ場所季節を撰ばず、衛生の上に於けるも將た經濟の點より云ふも家齊の上に於て女子に缺く可からざる所謂一舉兩得の技なりと云ふべし、故に女子としては貴賤の別なく進んで學び求めて研究せざるべからず、然るに世間動もすれば既に此の業の女子に必要な事を認めつゝあるにも拘はらず時に或は一種贅物の如くに看做さるゝ傾向なるとせず豈に嘆すべき事に非ずや、當局の人茲に視る所ありて過る明治三十年九月始めて女子高等師範學校家事專修科に編物料を置かれ次で三十二年に於て同校技藝科にも編物料を置かる而して三十四年に同校附屬高等女學校專攻科の新設あるや亦編物を習得せしむること規定せらる、其の結果延いて各地方

の女學校は勿論、東京府教育會學術講習會及び同府女學講習會等に於ても漸次此の科を設けらるゝに至れり、今や都鄙到る處此の業の日を逐ふて隆盛に趣かんとするに當り編物料の本旨を明示し世の惑を解くに足るべき適當なる編物教科書の未だ世に顯はれざるは甚た遺憾とする所なり、因りて爰に拙き筆もて予が十數年來授業に經驗せし事を書き綴りて高等女學校等の教科書に充てんと欲す、聊か斯道に裨益する所あらば著者望外の幸なり。

一本書記する所は専ら家齊上必要なる普通實用に適する所の物を撰び努めて贅澤玩弄に近き者は省きて載せず且つ女子をして啻に物品を作製せしむる而已に止めず、

其の補綴保存洗濯及び廢棄に屬する絲の利用方等日常
缺く可からざるものは細事と雖も掲げて便に供せんと
務めたり。

一本書は授業時數を一週壹時と爲し二ヶ年(八十時)を以て
修了せしむる豫定なりゆゑに是を學期に區別すること
左の如し

第一學年	自第 七章	至第 七章	十四時
第一學期	自第 七章	至第 八章	十四時
第二學期	自第 八章	至第 十三章	十四時
第三學期	自第 十三章	至第 十六章	十二時
第二學年	自第 十六章	至第 十九章	十四時
第一學期	自第 十九章	至第 十九章	十四時

第二學期	自第 二十四章	至第 二十四章	十四時
第三學期	自第 二十五章	至第 二十八章	十二時

右の如く豫定すと雖も或は豫定以上の時數を得べき學校
に在りては此の技熟達の子女にして本科を卒り尙進んで
學ばんと欲する者に科外練習を爲さしむるの一助と爲さ
んがため附録として巻尾に二三のものを掲げたり

明治三十八年一月

著者識す

編物教科書目次

第一章	編物の意義	一頁
第二章	用具の名稱種類用ひ方	二
第一	用具の名稱種類用ひ方	二
第二	用絲の名稱種類用ひ方	四
第三章	増減	六
第一	増方(鈎針)	六
第二	減方(鈎針)	六
第三	増方(棒針)	六
第四	減方(棒針)	七
第四章	鈎針編	七
第一	編方の種類	七

第二章	小編應用增方	一一
第三章	長編應用增方	一三
第五章	小編應用(鈎針)	一三
第一	大黑帽子	一四
第六章	小編應用(鈎針)	一六
第一	六角形涎掛	一六
第七章	棒針編	一九
第一	編方の種類	一九
第二	編方の稱 <small>なづかひ</small> 及説明	二三
第八章	表編應用(棒針)	二四
第一	護謨編カワス下	二五
第九章	裏編應用(棒針)	二五

第一章	腕貫(男物)	二五
第十章	小編應用(鈎針)	二八
第一	四角形辨當袋	二八
第十一章	表編應用(棒針)	三一
第一	靴下	三一
第十二章	鎖編、輪編應用(鈎針)	三五
第一	菊花編巾着	三五
第十三章	小編應用(鈎針)	三九
第一	腹掛	三九
第十四章	小編、長編應用(鈎針)	四二
第一	花靴	四二
第十五章	小編、輪編應用(鈎針)	四五

第一 山折帽子……………四五

第十六章 表編應用(玉附棒針)……………四九

第一 襯衣……………四九

第十七章 筵編應用(玉附鈎針)……………五四

第一 雪帽子……………五四

第十八章 表編應用(玉附棒針)……………五九

第一 組編衿卷……………五九

第十九章 鎖編應用鈎針大)……………六一

第一 春季用肩掛……………六一

第二十章 小編應用鈎針……………六四

第一 ナヨッキ下……………六四

第二十一章 表編應用(玉附棒針十二番)……………六八

第一 木の葉形涎掛……………六八

第二十二章 鎖編應用鈎針……………七三

第一 麻の葉形肩掛……………七三

第二十三章 小編應用(鐵製鈎針)……………七七

第一 矢筈形帶締……………七七

第二十四章 鎖編應用鈎針……………七八

第一 七寶編折靴……………七八

第二十五章 表編應用(棒針)……………八二

第一 藤編手袋(女物)……………八二

第二十六章 表編應用(棒針)……………八八

第一 木の葉連續編貨幣袋……………八八

第二十七章 補綴方……………九二

第一 縱補綴、橫補綴、掛合……………九二

第二十八章 保存、洗濯、廢絲、利用方……………九四

第一 保存方……………九四

第二 洗濯方……………九五

第三 廢絲利用方……………九六

編物教科書目次終

附錄目次

第一章 表編 裏編 應用棒針……………九八

第一 洋袴下……………九八

第二 手袋(男物)……………一〇二

第三 手袋(女物)……………一〇九

附錄目次終

編物教科書

森本義子 著

第一章 編物の意義

夫れ編物とは毛絲絹絲其の他各種の絲を以て被服或は室内裝飾品等諸般の物を作製する所の總稱なり然れば此の業わざを學ばんには先づ用具用絲の名稱種類用ひ方等の概略を覺知せざるべからず而して授業を受くるに臨んでは第一に姿勢を正して克く記憶根氣に耐へ倦まず怠らずして専ら手指の熟練を要すべきなり尤も人に巧拙あり業わざに難

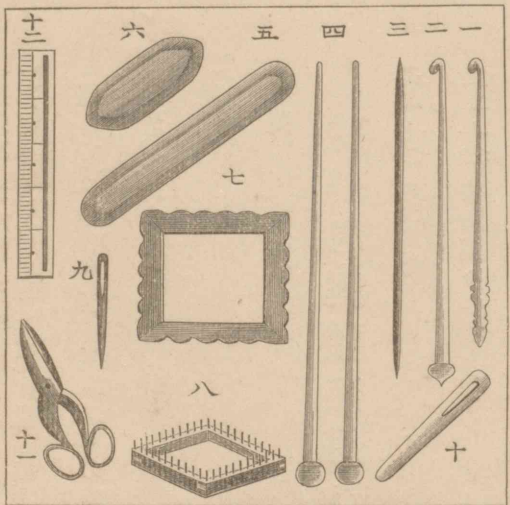
易ありと雖も總て技藝に屬するものは業の難と易とに依らず其の意匠精巧綿密なるを主とするが故に絲の撰び方色の配合恰好等最も注意せざる可からず亦た應用變化の基く所は何れの編方なるを問はず單に増減の二義に因りて種々の物を製出する者なれば此の點に留意すること肝要なりとす

第二章 用具の名稱種類用ひ方

第一 用具の名稱種類用ひ方

- 一、 鈎 針 大中小 (象牙、角、鐵にて造れるもの) 象牙及び角製は毛絲に用ひ鐵製は絹絲又はレース絲に用ふ圖の如し
 - 二、 玉付鈎針 大中小 (右に同じ) 苴編の中廣き物に用ふ
 - 三、 棒 針 大中小 (象牙、角にて造れるもの) 襯衣、洋袴下、花靴其の他種々の物に用ふ
- 手袋、靴下其の他種々の物に用ふ

- 四、 玉付棒針 大中小 (角、竹、木、護謨にて造れるもの) 襯衣、袴卷、肩掛、涎掛、等の如き巾廣きものに用ふ
- 五、 卷 板 大 (櫻の木にて造れるもの) 輪編をなすに用ふ
- 六、 卷 板 小 (右に同じ) 花の類を作るに用ふ



- 七、掛 杵大 (櫻の木にて造れる) 置き物敷の類を作るに用ふ
 - 八、掛 杵小 (木製にして竹の釘を) 花瓶敷、置物敷の類を作るに用ふ
 - 九、止 針 (鐵にて造れるもの) 編み終りの時絲を止るに用ふ
 - 一〇、リボン通し (象牙、又は角、にて造れるもの)
 - 一一、鋏 (鐵製)
 - 一二、曲尺度 (竹製)
- 第二**
- 用絲の名稱種類用ひ方
- 一、毛 絲 (極太) 帽子、敷物、の類を作るに用ふ
 - 二、同 (並太) 普通種々の物を作るに用ふ
 - 三、同 (中細) 右に同じ
 - 四、同 (極細) 右に同じ
 - 五、スコツケ (並太) 膝掛、靴下の類を作るに用ふ

- 六、同 (中細) 右に同じ
 - 七、同 (極細) 手袋、肩掛、夏季の靴下を作るに用ふ
 - 八、シヤケツ (並太) 肌着、洋袴下の類を作るに用ふ
 - 九、同 (中細) 肩掛、手袋、其他種々なる物を作るに用ふ
 - 一〇、同 (極細) 右に同じ
 - 一一、アイスワール (極細) 夏季の肩掛及び裝飾品の類を作るに用ふ
 - 一二、フロス (中細) 普通種々の物を作るに用ふ
 - 一三、デンボウ (極太) 袷卷、帽子の類を作るに用ふ
 - 一四、絹絲 (並絲) 半襟、半掛、手袋の類を作るに用ふ
 - 一五、同 (穴絲) 手袋、袋物、帶止の類を作るに用ふ
 - 一六、レース絲 (普通三十番) 夏季手袋、靴下、其の外裝飾品の類を作るに用ふ
- 此の外用具用絲の類は種々ありと雖も普通に有つては餘

り必要のなきに依り他は略して載せず

第三章 増減

第一 増方(鈎針)

一、第一増方 第二増方 第三増方
第一増方は一ツ目に二ツ入るゝ第二増方は鎖にて増す
第三増方は編終の兩端にて増すを云ふ

第二 減方(鈎針)

一、第一減方 第二減方 第三減方
第一減方は目一ツを置き次の目を編む第二減方は目二ツを一度に編む第三減方は編終の目を残すを云ふ

第三 増方(棒針)

一、第一増方 第二増方 第三増方
第一増方は目と目の間を取りて編む第二増方は一ツ目に二ツ入るゝ(一ツは表目を編み一ツは裏目を編む)第三増方は針の下より糸を上に掛けて編むを云ふ

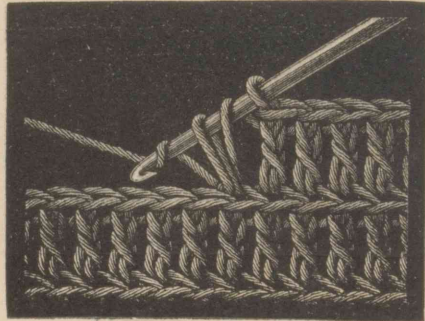
第四 減方(棒針)

一、第一減方 第二減方 第三減方
第一減方は目二ツを一度に編む第二減方は目一ツを取り表目一ツを編みて取りたる目を其の上に掛ける第三減方は目二ツを針の下より一度に通して編むを云ふ

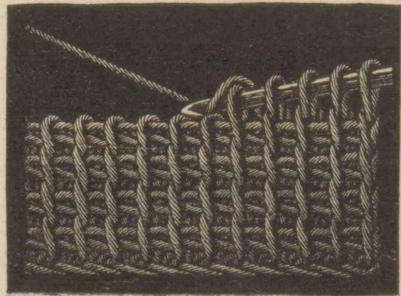
第四章 鈎針編

第一 編方の種類

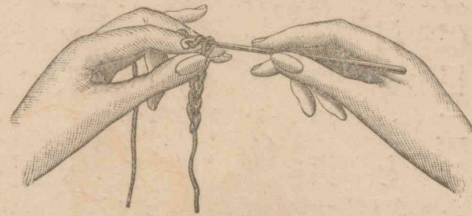
編 長



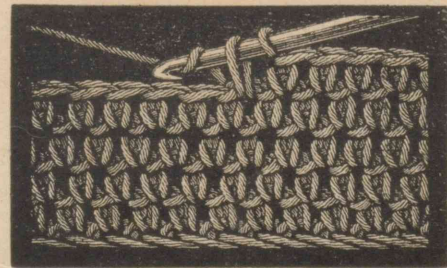
編 薙



編 鎖

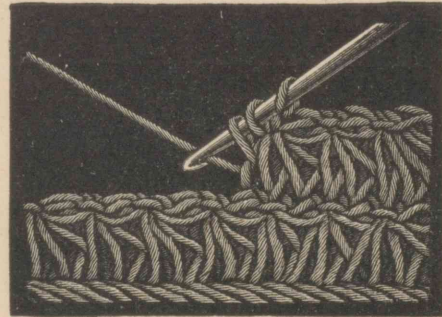


編 小

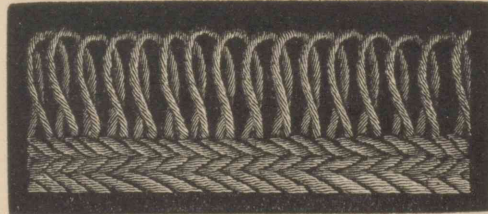


一、鎖編 小編 長編 薙編 笹編 輪編 拔出編
左圖の如し

編 筐



編 輪



編 出 拔



第二 小編應用増方

一、丸形

(第一)鎖三ツ輪くさりとなして一ツ目に二ツ宛あてつ入れる即ち第一の増方なり

(第二)一ツ目に二ツ宛あてつ入れる

(第三)一ツ置きに増す而して漸次一廻ひとまわりに六ツ宛あてつ増す

二、三角形

(第一)鎖三ツ輪くさりとなして一ツ目に三ツ宛あてつ入れる

(第二)前の三ツまへ入れたる中央の目に又三ツ宛あてつ入れ他は皆一ツ宛あてつ入れる斯の如く一廻ひとまわりに六ツ宛あてつ増す

三、四角形

(第一)鎖四ツ輪くさりとなして一ツ目に三ツ宛あてつ入れる

第二前の三ツ入れたる中央の目に又三ツ宛つ入れ他は皆一ツ宛つ入れる斯の如く一廻に八ツ宛つ増して編み行くなり

四、六角形

(第一)鎖三ツ輪となして一ツ目に二ツ宛つ入れる

(第二)一ツ目に二ツ宛つ入れる

(第三)一ツ置きに増す

(第四)三ツ目に一ツの目に三ツ宛つ入れる

(第五)前の側の三ツ入れたる中央の目に又三ツ宛つ入れる而して漸次一廻に十二宛つ増す

五、八角形

(第一)鎖三ツ輪となして丸形に編み目數二十四となりた

るとき六角形の如く三ツ目に一ツの目に三ツ宛つ入れれば八角となるなり

第三 長編應用増方

一、丸形

(第一)鎖七ツを輪となし更に鎖四ツを爲して前に爲せる輪の中に長編十五入れる

(第二)鎖四ツを爲して一ツ目に長編二ツ宛つ入れる

(第三)鎖四ツを爲して此の時は一ツ置きに増す又次の側には二ツ置に其の先の側には三ツ置に漸次一廻りに十五宛つ増し行くなり

但し六角形八角形は小編の方に準じて編むべし

第五章 小編應用(鈎針)

第一 大黒帽子

満一ケ年位の小児用
用絲毛絲並太三オンス

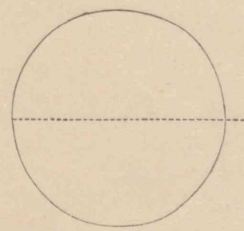
一、編方

(第一)鎖三ツ輪くまとなして一ツ目に二ツ宛あつ入れる即ち第一の増方なり

(第二)二ツ目に二ツ宛あつ入れる

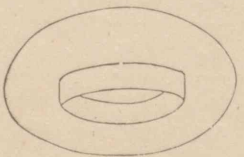
(第三)一ツ置まに増す而して漸次一廻ひとまわりに六ツ宛あつ増すこと直經七寸迄編み夫より増減を爲さず五ツ廻まわ編む第一圖の如し次は一廻ひとまわりに六ツ宛あつ減す目一ツを置きて編む即ち第一の減方げなり第二圖の如し斯く減じつゝ編二ツに折りて上の七寸となる迄減じ夫より増減ならしに壹寸編みて縁へとなし終しまりに裏より一廻ひとまわ抜き出たらしめて止める第三圖の如し

直徑七寸



第一圖

出來上リ



第二圖



第三圖

二、玉の作り方

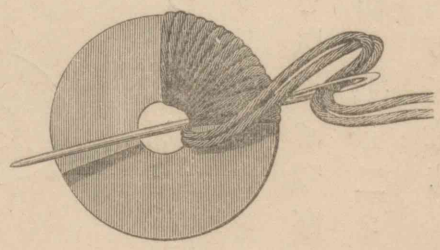
玉を作るには先づ厚き紙(古端書を用ふる)を二枚重ね直經二寸の丸形に切り其の中央を圖の如く四分の一を切り抜き是れに毛絲を以つて順序よく穴の見えざる迄に巻き其の周圍を切り紙を二ツに分けて中を堅く括り程ま好く切り揃へて付けるなり

但し玉の大小に依り(假例ば直經一寸の玉を作る)斟酌すべし

第六章 小編應用(鈎針)

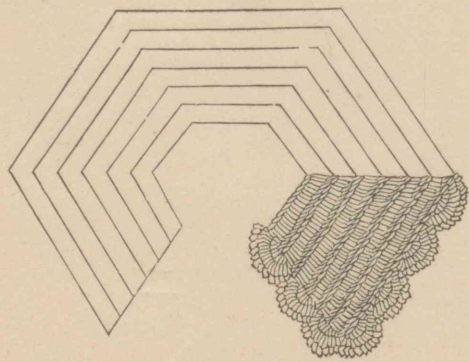
第一 六角形涎掛 用絲毛絲中細壹オンス

一、編方



鎖六十八編みて針に掛りたる目の下四ツ目より長編を
 なし十一目毎に一ツ目に三ツ宛つ入れて一側編み終ら
 ば鎖り一ツ爲して裏に返へし其の上の小編をなす行く
 べし此の時は向ふ側の目を拾ひ編み長編の側に三ツ入
 れたる中の目に三ツ宛つ入れて編み行き編み終らば表
 に返へし鎖四ツ爲して向ふ側の目を拾ひ長編にて又一
 側編む毎側三ツ入れたる中央の目に三ツ宛つ入れる又
 其の次の側は小編をなす斯の如く長編六側小編六側爲
 して飾を附ける裏に返して圖の如く横の端に編み附け
 前の小編をなしたる處に長編を六ツ入て次の小編の處
 に附ける又鎖四ツ編み出て次の小編の處に附ける次は
 長編を六ツ入れて其の先に小編にて附る又鎖四ツを編

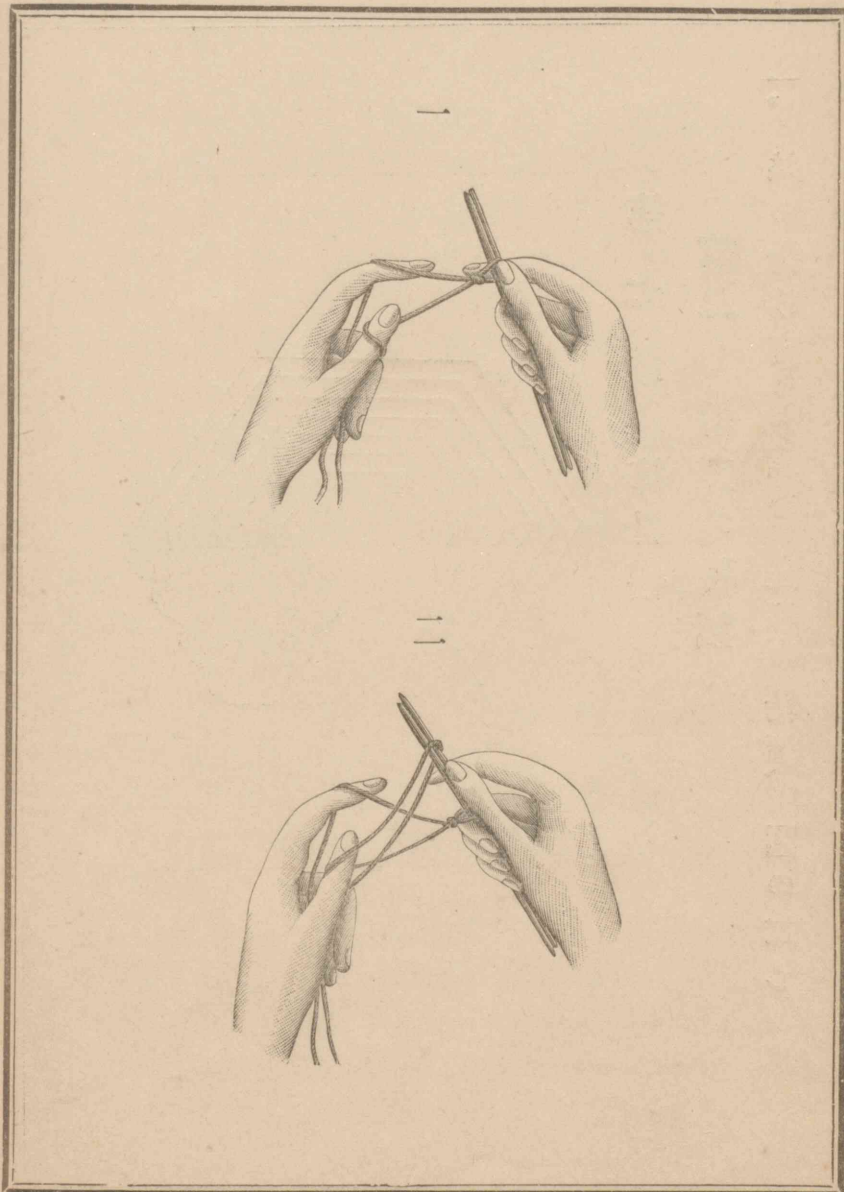
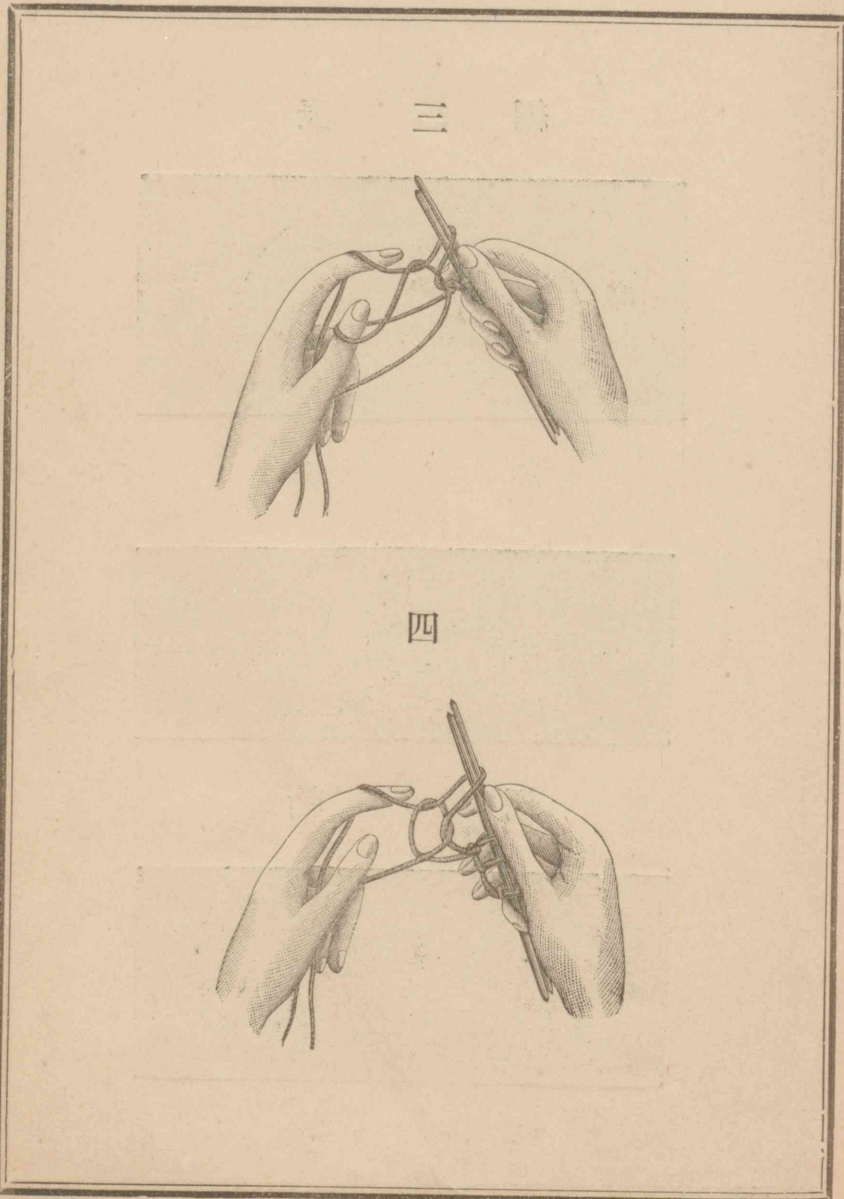
一八
 み出して角かどに附ける夫それより目三ツ置きに長編六ツ入れ
 て又三ツ置きに小編にて附ける斯ごとの如く此の一侧ひとへは皆
 同じく爲して終る表に返へり前まへの長編の上に又長編を
 一ツ爲して鎖くさり四ツを編み元の處に針を入れ抜き出た
 て球形を作り又同じ處に長編を入れる斯く編み行きて
 前まへの側そばの長編の上に二ツ宛つつ長編を入れ其の間に球形
 を作り行けば長編十二球形十一となる而して次の鎖くさり四
 ツの處に小編にて附ける斯ごとの如く終迄ましま皆同じ次は紐ひもを
 附ける毛絲けし中細ちみなれば三綫おとを七八寸の丈だけに鎖くさりを編みて
 咽喉のどの處即ち編始はじめの目に一ツ置きに小編にて附ける終
 に又七八寸鎖編くさりあみを爲して止める兩端りょうたんに總よを附けて終る
 なり



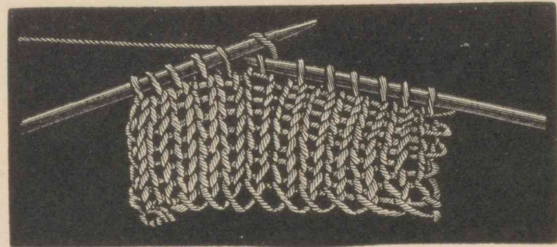
第七章 棒針編

第一 編方の種類

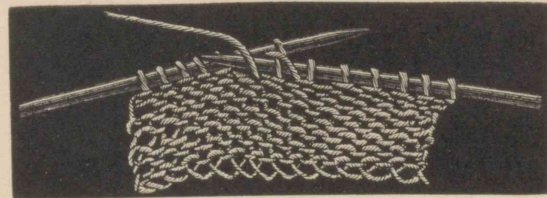
一、 絲の掛け方 表編、裏編、輪編、圖の如し



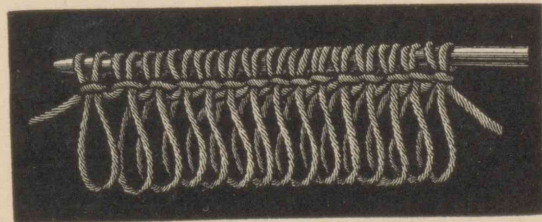
編 表



編 裏



編 輪



第二 編方の稱及説明

一、(目)表(裏)作る(一ツ一度)(二ツ一度裏)(三ツ一度)(一ツ取る
二ツ一度其の上に掛ける)(一ツ取る表一ツ其の上に掛
ける)(止める)

二、(目)とは最初に作るべき目を針に掛けるを言ふ

三、(表)とは針を上より下に刺すを言ふ

四、(裏)とは針を下より上に刺すを言ふ

五、(作る)とは右に持ちたる針の下より上に糸を掛けて作
るを言ふ

六、(二ツ一度)とは目二ツを表と同じく針を上より下に刺
し一度になして減ずるを言ふ

七、(二ツ一度裏)とは二ツの目を裏と同じく一度に針を下より上に刺して減ずるを言ふ

八、(三ツ一度)とは目三ツを一度に刺して一ツとなすを言ふ

九、(一ツ取る二ツ一度其の上に掛ける)或は(一ツ取る表一ツ其の上に掛ける)とある時は一ツ編ますと取り次に二ツ一度となし或は表一ツ爲して前に取りたる目を其の上に掛けて減ずるを言ふ

一〇、(止める)とは一ツ取り次に表一ツなして前に取りたる目を其の上に掛けるを言ふ

第八章 表編 應用(棒針)

第一 護謨編カウス下 用絲毛絲並太壹オンス目數六十八

一、編方

編方は二本の針に六十八の目を掛けて一本を抜き取り夫を三本の針に分ち二十四宛つ二本と二十を一本と表二ツ裏二ツ以下皆四寸五分迄編み廻りて止める其の止め方は一ツ取る表一ツ其の上に掛ける即ち第二の減方なり

第九章 表編 應用(棒針)

第一 腕貫(男物) 用絲毛絲並太二オンス目數六十八總丈一尺二寸五分

部分編

一、口護謨編

口護謨編は先づ二本の針に六十八の目を掛け一本を抜き取り是を三本の針に分ち表二ツ裏二ツにて二寸五分迄に編む

二、腕の増方

腕の増方は口編の處より一寸五分奥にて増し始む一廻の終の目を一ツ残り置き其の目と手前の目の間の糸を左に持てる針に掛け是を捻りて編み(第一増方)残り置きたる目一ツを編む次の針にて始の目一ツ編み其の目と次の目の間にて又前の如く第一増方にて一ツ編む即ち圖の如く目二ツ増したるなり夫より七廻は並に編みて八廻目に又同じ處にて増すこと八廻毎に八度(始より)増

す奥護謨編は口編に同じ

三、編方の順序

口の方より始む護謨編二寸五分編みて平編一寸五分を爲し平編は即ち皆表に編む夫より部分編に示したる如く八廻毎に八度増し終らば口元より一尺一寸になる迄平編になして奥の護謨編一寸五分編みて止めるなり但し女物は目數六十總丈一尺一寸護謨編二寸五分八廻毎に六度増す其の他は男物に同じ



此の所より増し始む

第十章 小編應用(鈎針)

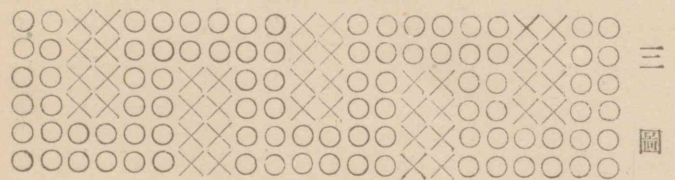
第一 四角形辨當袋

用絲毛絲中細
壹オンス(二色)

一、編方

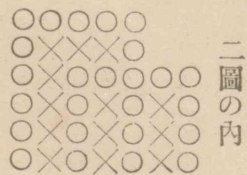
編方は先づ地色となすべき色の糸にて鎖四ツを編み輪
となして其の四ツの目一ツ毎に小編三ツ宛つ入れる次
の側には三ツ入れたる中央の目に三ツ宛つ入れ他の目
は皆一ツ宛つ入れる斯の如く一側毎に四ツの角にて増
ち編むこと十一側迄皆同じ而して惣目數八十八となり
たれば是より増減をなさずに一廻編て一圖の如くな
て模様を編み出たす即ち變色六ツ地色二ツ又變色六ツ
地色二ツ斯の如く一側皆同じ次の側も又同じく編みて

其の次の側は變り色二ツ地色二ツ斯の如く二側は皆同じ即ち圖の如く爲し模様

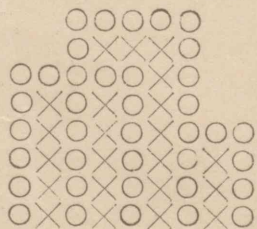


三圖

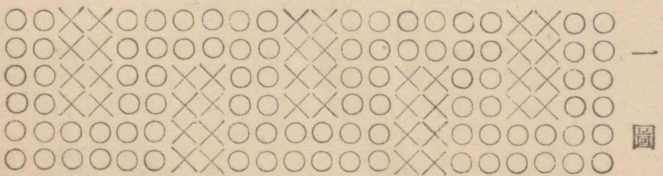
×○印は變り色
○印は地色



二圖の内



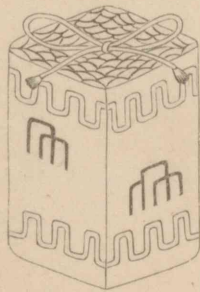
二圖の内



一圖

を編み終らば地色のみにて五ツ側編み夫より二圖の如く四處にて模様を編み出たし終らば亦た地色にて五ツ側編み夫より三圖の模様を編み出たし終りて變り色の絲を切り地色の絲にて深さ三寸七八分位まで編みて鎖五ツを編み目を四ツ置きて五ツ目に小編にて附ける以下一廻皆同じ次の側も鎖五ツ編み前の五ツの鎖目の中に小編にて附ける斯の如く三廻爲して止める此の鎖に紐を通すべし

り上來出



第十一章 表編應用(棒針)

第一 靴下(十文) 用絲スコツチ四オ
ンス目數七十二

但し 大小の差は一文毎に目數にて四ツ寸法にて五分とす

部分編

一、口護謨編

先づ二本の針に七十二の目を掛け一本を抜き取り是を三本の針に分ち表二ツ裏二ツにて其の寸法迄編む

二、腓腸の減方

口編の際より三寸五分下の處にて一廻の終の目を三ツ残る迄編む二ツ一度表一ツを爲して次の針の始にて表一ツ、一ツ取る表一ツ其の上に掛ける是にて二ツ減じたるなり他は皆並に七廻編みて八廻目に又同じ處にて減

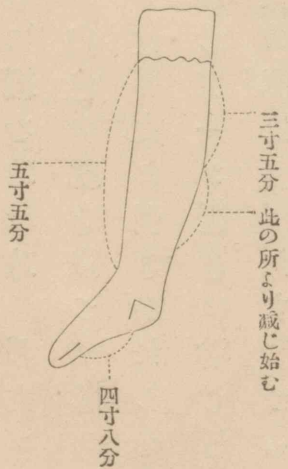
六 爪先の止方

編み終りたる絲を七八寸の丈に切りて止め針に通し二十の目を表裏共正しく針に通し置き針に掛けたる向ふの目の裏より表に通し針より外さず其の儘に置き手前の針の目を裏より表に通し即ち手前の方に又向ふ側の前に通したる目の表より針を通して外し直ぐに次の目の裏より表に通し又手前の側の針即ち前に裏より通したる目の表より通して目を外し取り直ぐに次の目の裏より表に通す斯の如く終迄皆同じ即ち是を掛け合せと云ふ第二十七章補綴方掛合せの圖を参照すべし

七 編方の順序

口編二寸五分編みて平編三寸五分編む夫より部分編に

示したる如く腓腸を減ずること八廻毎に四度減じたる後又五分編みて踵を作る夫より四寸八分編みて爪先を減ずるなり



第十二章 鎖輪編 應用(鈎針)

鎖輪編 長編

第一 菊花編巾着

用絲毛絲並太壹オンス花は白又は黄色葉は青色とす

一、編方

先づ黄色の糸を以て鎖三ツを輪と爲し小編一ツ編みて鎖四ツ編み針を抜きて鎖の元の處より針を通し鎖の先に針を掛け手前の方に抜き出たして下の鎖目に小編を爲す斯く編み行く時は球の形三ツ出来小編六ツとなる次の側も同じに編む時は球の形六ツ小編十二となる爰にて糸を切り白色の糸を以つて圖の如く其の切りたる處に附て五分位の丈に引き出たして輪編と爲す又次の目に同じく爲し目一ツ置きに増し行きて第一の増方此の側を終る次の側は引出たすことも増すことも爲さず唯小編にて一廻編む其の次の側は又引出たして輪編をなす三ツ目に増す其の先の側は小編のみなすべし斯の如く編み行くこと輪編五ツ廻り小編四廻なす増數は一

廻に六ツ宛つ丸形増方増し行きて五ツ廻りならたらば其の儘小編を爲さず止め置きて裏側を編むべし此の度は青色の糸を以つて鎖五ツを編み夫を輪となし又鎖四ツ編みて始の輪の中に長編十一入れて四ツの鎖の上の方にて止める夫より又白色の糸にて表を編みたると同じに輪編をなし終らば表裏を合せるなり合せ方は青色の糸にて一廻り小編にて合せる

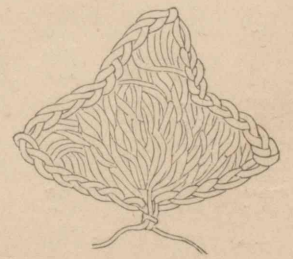
但し目數八ツは表面已編む續いて葉を附けるなり

二、葉の附方

鎖四ツ編みて二度膝けたる長編を鎖の出でたる目に三ツ入れる此の長編は始より皆抜き出たさすに針に一ツ宛つ残り置く即ち始の鎖共に四ツの糸が針に掛り居る

なり是を筵編の如く抜き出たして
 別に鎖一ツを編み目一ツ宛つ抜き
 出たして止め編に爲す而して又鎖
 四ツ編みて又同じに爲すこと三度
 する時は圖の如く成るなり夫より
 鎖七ツを編みて次の目に長編を入
 れる又鎖七ツ編みて同じ目に長編を
 入れ又鎖七ツを編みては前と同じく
 編むこと一廻に葉の數五ツ出來る
 なり次に紐を結びて附ける

葉の編方

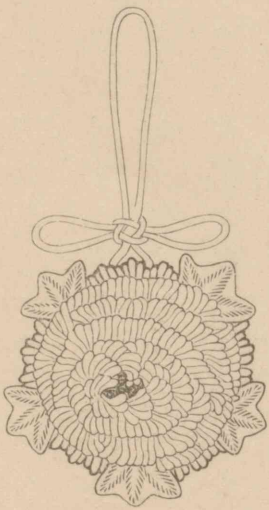


三、紐の組方結方

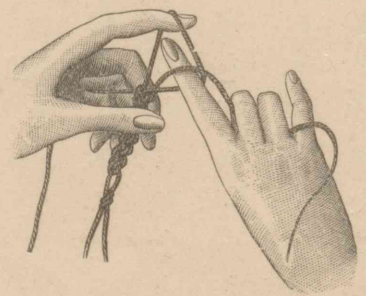
總角結を爲すには先づ二尺二寸の紐を要す然れば是を
 組むには其の六倍の絲を(並太なれば二たすち 中細なれば三すち) 合す以つて中

央より圖の如く組み行くときは八ツ打の如き紐を得る
 なり是を圖の如く結びて上の方に附けるなり

出上り



絲の組方



第十三章 小編 應用(鈎針)

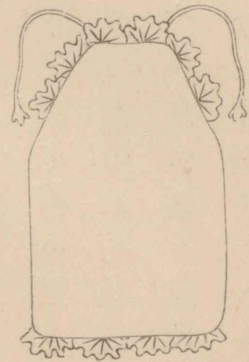
第一 腹掛 滿一ヶ年位の小兒用 用絲毛絲並太三オンス

一、編方

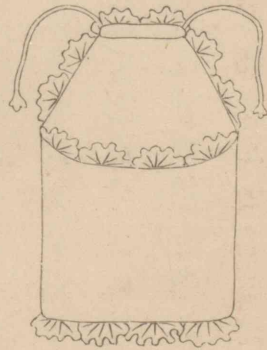
先づ鎖を三寸編みて其の上に小編一ツ宛つをなす表に返して鎖三ツ編み針に掛りたる下の目一ツ置きて次の目に針を通し糸を引出たし又次の目も同じに爲して下の小編を又其の如く糸を引出たすこと目二ツ爲して針に掛りたる糸の都合五ツとなりたれば夫を一度に抜き出たして結ぶ而して其の結びたる處に針を入れて又糸を引出たし前の笹編の後の方に斜になりたる糸あり是に針を掛けて糸を引出たし又下の小編を二ツ前の如く爲すときは針に糸五ツ掛るなり是を結びて前の如く編み行くこと鎖三寸の終迄皆同じ斯く編み終りたらば裏に返へして鎖一ツ編みて笹編の結びたる處のみに小編を二ツ宛つ入れる此の側は皆同じく爲して終又表に返

へし鎖三ツ編みて前の如く笹編をなす此の側より圖の如く兩脇共斜になる様兩端にて笹編一ツ宛つ増す斯の如く表より笹編裏より小編と編み行くこと五寸迄皆同じ笹編にて編み終りたる時糸を切らず鎖を五寸編みて片脇の始の處に附ける而して前の如く笹編の結びたる處には二ツ宛つ鎖の處には一ツ宛つ小編をなして一廻り終る夫より丈五寸となる迄胸の方と同じく笹編と小編にて編み廻りて止める夫より圖の如く飾りを附けるなり紐は毛糸二縷にて七八寸程の鎖を爲し圖の如く胸の方に編み附け又七八寸の鎖を編みて兩端に總を附ける尙胴の方へも紐を附けんとする時は二尺五寸位の鎖を編み後にて五六分置にすくひ通し前にて結ぶなり

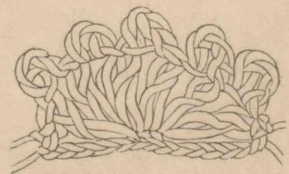
前面



後面



飾の編方



第十四章

小編、長編
筐編、楚編

應用鈎針

第一 花靴

用絲毛絲並太壹オンス

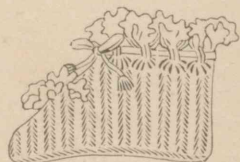
一、編方

鎖六ツを編み出たし其の鎖目に小編を一ツ宛つ編み(中央の目には三ツ入れる)裏に返して鎖一ツ編みて又小編一ツ宛つ編み附け行く此の度は向ふ側の目即ち絲一ツ

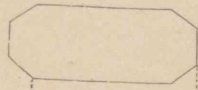
に掛けて編み前に三ツ入れたる中の目に三ツ宛つ入れる斯の如く表裏より十二側編むときは自然に高低の出来るに依り其の高き處六段と成りたれば夫より二側は中央にて増さずに編む而して目數十迄編みて後方に返へし鎖一ツをなして又編むこと二十二側即ち高き處十一段出来る迄増減をなさずに編みて圖の如く合せるなり夫より上の口の方に筐編にて一廻り爲す斯くすれば其の數十五出来る其の上は筐編の結びたる處に長編を二ツ宛つ入れる長編の上は編始の處に小編一ツ附けて目二ツ飛ばして三ツ目に長編を一ツ入れ鎖四ツ爲して鎖の元の處に針を入れ抜き出たして又長編を同じ處に入れる斯くなら行けば長編五ツ球四ツ出来る而して目

二ツ飛ばして三ツ目に小編にて附ける又斯の如く編み
 行きて此の側にて終る而して跗の處には口飾の編方と
 同様に圖の如く附ける蹠は筵編にして先づ鎖六ツ編
 みて終りに少し長めに引き出たれ次の目に針を入れて順
 に引き出たせば針に掛けたる絲は六ツなり是を二ツ宛
 つ引き出たして次は兩端にて目を増し八ツとなる是よ
 り其の度毎に兩端にて増すこと目數十四となる迄編み
 て其のまゝ更に九側編みて後兩脇にて目數六ツとなる
 迄減ず其の減じ方は兩端共二ツ一度に編む而して蹠を
 附ける表の方を見て小編にて附ける爪先の方より壹寸
 許りの處にて稍緩めに附けるなり圖の如し

り上來出



蹠を



此の所より増し始む

此の所より減じ始む

第十五章 小編 應用(鈎針)

第一 山折帽子

小編 輪編 滿一ケ年位小兒用 用絲毛絲並太一オンス

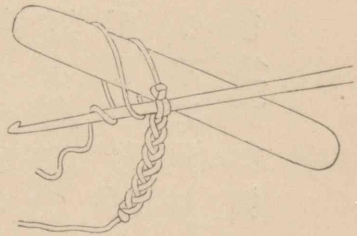
一、編方

鎖十五編みて圖の如く針に掛けたる下の目を一ツ置き
 て其の先の目に針を通し巻板を針の向ふに當て、持ち
 針と共に絲を一回巻きて又針に絲を掛けて抜き出たれ
 鎖一ツをなと一圖の如し

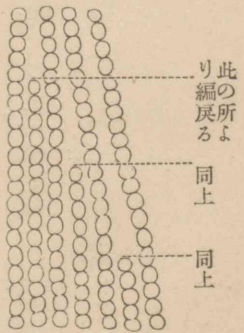
又其の次の目に針を通して輪編を爲すこと此の側は皆
 同じ終に鎖一ツをなして板を抜き取り裏に返へせば前
 に編みたる鎖數二倍となり居るがゆゑに此の度は目を
 一ツ置きに抜き出たしに爲して此の側は終る即ち元の
 目になる又表より巻板を用ひて輪編をなすこと前の如
 くして編み行くこと壹尺四寸となりたれば輪となりて
 抜き出たしにして止める是にて下の輪編は出來たるな
 り又上の分は鎖三十一爲して是に小編を一ツ目に一ツ
 宛つ爲すときは三十の小編が出來るなり裏に返へし鎖
 一ツ爲して此の度は向ふの目一縷に掛けて編む次は又
 鎖一ツ爲して目數五ツ残る迄前の側の如く編む又返へ
 して終まで編み又返へして鎖一ツ爲し三十の目を編つ

つ往復す而して此の度は目數二十まで編又返へして終
 るまで編む又返へし鎖一ツを爲して三十の目を残らず編
 尚鎖一ツを爲し又返へして終まで編て鎖一ツを成す又
 返へして此の度は目數十五まで編て返へし終まで編又
 鎖一ツを爲し又返へして三十の目を往復す又五ツ残り
 て編こと前の如し(左圖を見よ)斯の如く編み行くこと下
 の廣き處にて壹尺三寸迄編みて後是を輪となりて止め
 る而して輪編の分に小編にて附け上の方を括りて合せ
 たる方に折り(左方に)總を附ける終に下の方を一廻り小
 編を爲すなり

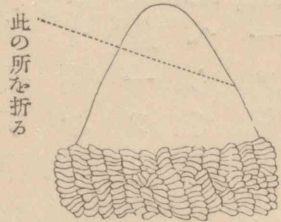
圖一第



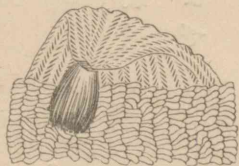
圖二第



圖三第



圖四第



出来上り

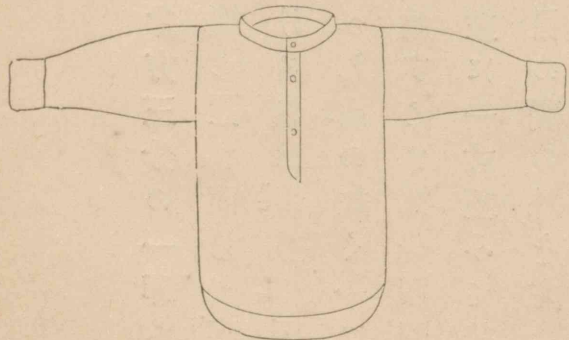
第十六章 表編應用(玉附棒針)

第一 襖衣 用絲毛絲並太
十三オンス目數九十

普通出来上り寸法

- 一 身丈 壹尺八寸
- 一 袖丈 壹尺四寸五分
- 一 袖目數は胴に同じ

り上来出



部分編

一、衿肩線方の増減

衿肩の線様は胴の目を三分し其の片方三分の一即ち目
數三十迄編みて残の目を別の絲に通し置き而して表に
返へし一ツ取る表一ツ其の上へ掛ける他は皆並に編み
て裏に返へし又皆並に編み表に返へし前の如く一ツ取
る表一ツ其の上へ掛ける斯の如く爲すこと都合四回即
ち四ツの目を減じたるなり夫より並に一寸編みて後此
の度は編終の目一ツ手前にて目と目の間の絲を左の針
に掛けて右の針にて捻りて編む是にて目一ツ増したる
なり即ち第一の増方なり終に一ツ残り居る目を編みて
表に返へし一ツ取りて他は皆並に編み又裏に返へし一

二、衿の附方

ツ取りて皆並に編みて前の如く増すこと後巾の目の半
數となる迄皆同じ而して一尺四寸位並に編みて止める
次は左の前の方を編む絲に取り置きたる目の半分を中
の分を残し置き針に取りて衿肩の方より編始増方減方
は右と同様なれども減するときは表より編終の目二ツ
一度に編み増すときには編始にて増すなり

衿の附け方は前巾の端の粒々出でたるものを針に取り
て(上前の方は表の上より編み始む)二綫の絲にて表一ツ
裏一ツにて終迄編み裏に返へして今編みたる終の目裏
目なれば裏に返へして編み始めに裏目より始む裏一ツ
表一ツと編み行くこと巾四分位を編みて釦穴を明ける

三、釦穴の明方

釦穴の明方は上より二寸編みて目數三ツ止める穴は圖の如く四ツ明けて此の側の終迄編み裏に返へし順に編み行きて穴の處にて目を三ツ新に針に掛ける他は並に編みて此の側を終る其の上五六回編みて止める次に小衿を附ける縦衿の如く目を拾ひて同様に編み行く釦穴は上前の縦衿の上にて明ける

四、袖の附方及減方

袖の附方は衿を附けたる如く胴の脇の方に編み附け壹寸迄編みて(胴の編方と同じ)編始の目を一ツ取り表一ツ其の上に掛ける後皆並に編みて終の目を二ツ一度に編み是にて二ツ減じたるなり斯の如く減ずること壹寸毎

に五度六分毎に五度四分毎に五度夫より壹寸五分編みて口編三寸を成す口編方は鐵製十五番位るの針に取りて三ツに分け表一ツ裏一ツの護謨編となして止める袖下より胴を續けて合す其の合せ方は衿を附けたると同様に兩方とも針に取りて一度に編みて止めるなり

五、編方の順序

編み方の順序は後の下より編み始む一ツ取る表一ツ一ツ作る一ツ取る表一ツ一ツ作る表一ツ一ツ取る表一ツ此の側は皆同じ裏に返へし一ツ取る表一ツ(此の側は前の側の一ツ作る一ツ取るをなしたる處は絲の綾に掛り居るが故に其儘表一ツと編み行くべし)一ツ作る一ツ取る終迄皆同じ斯の如く幾度も繰り返へし目的の丈に達つする

迄編み衿肩を作り前巾を編み衿を付けて後袖を付けて脇を合せ終るなり前圖の如し

第十七章 長編應用(玉附鈎針)

第一 雪帽子 滿一ヶ年位の小兒用 用絲毛絲並太三オンス

一、編方

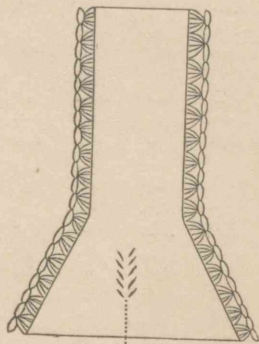
鎖二十九編みて是を三側筵編になし四側目の始より目を五ツ迄並の筵編に爲し六ツ目の目にて針に絲を膝け其の目に針を入れて絲を引出たし又絲をからけて同じ目に入れて絲を引出たすこと三回爲し其の針に掛り居る所の絲を一度に抜き出たせば球の形に成る次の目より五ツ筵編をなして六ツ目に又前と同様に球を作りて

編み行くこと此の側は皆同じ夫より又三側並の筵編になして四側目に又前の如くなし球を作りて編み行くべし(前側の球と球の間にて作る)此の度は五ツ出来るなり斯く編み行くこと始の二十九の鎖の丈の三倍迄増減を爲さずに編む而して一圖の如く此の中央の目の兩脇にて毎側二ツ宛つ増す此の丈は上の増減を爲さずに編みたる丈の三分の一迄編みて止める是より兩脇の分を作る二圖の如く別つに鎖二十九編みて後を編みたると同じになし丈は後の上部の三分の一ツ迄編みて同圖の如く右側にて此の數の三分の一ツを減じて止める而して又此の編始の鎖の處より始めて毎側右の端にて増すと後の増したる分と同様に止める是は左の分なれば

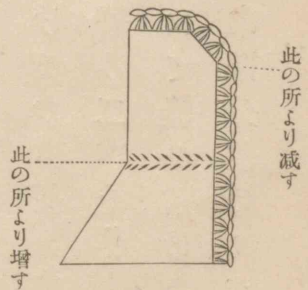
是に反對せるものを尙一ツ作り而して是に飾りを附ける圖の如く後の兩脇の目に長編をなす如く針に絲を掛けて其の目に針を入れ絲を引出たし又次の目にも其の次の目にも斯くなして三ツを一度に結び笹編の如くなす又針に絲を掛けて元の處に針を入れて絲を掛け又次の目又其の次の目へと絲を引出たし又三ツを一ツになして結び編み行くこと兩側共同じ次に兩脇の後に附くべき處には後と同じく圖の如く附ける而して後と兩脇を合す其の合せ方は表を外になして左りの方は前への方を手前になして下の方より小編にて合せるなり(後の方は兩脇よりも長くなしあるに依り其の長き分は兩脇の上の方の減じたる處にて緩めに附け行くなり)然て夫

より顔の廻になる處に飾を附ける其の附け方は後の兩脇に附けたると同じくなして其の上は三圖の如く二度からけたる長編を九ツ宛つ入れる(長編の間に鎖一ツ宛つ編みて下の笹編の間の處一ツ置きに入れて)其の上は絹絲若しくは毛絲にて別色の絲を以つて鎖三ツ編みて次の長編の間に附け又鎖三ツ編みて次に附ける斯の如く一廻爲して終る鑊の方も同じくすべし又上の方にリボンを結びて附ける而して紐を附けるなり紐は丈二尺位に鎖をなす夫に小編を一ツ宛つ編み二本を作りて下の増したる處の境目にリボン通して縫ひ附ける後には球を附け前には總を附ける紐は巾四分位のりボンにしてよし

第一圖

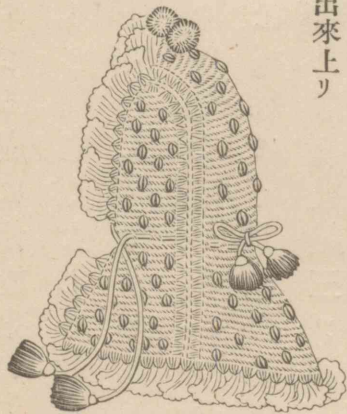


第二圖



出来上リ

第三圖



第十八章

表編 輪編

應用(玉附棒針)

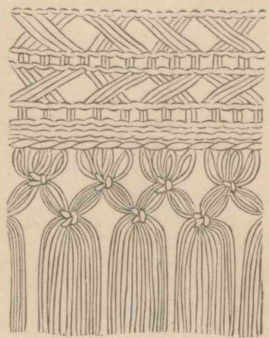
第一組編衿卷

用絲デシボウ、又は毛絲並太六オンス
目數六十六丈六尺巾七八寸より一尺迄

一、編方

(第一)一ツ取る皆表(第五)迄皆同じ(第六)二ツ一度一ツ作る
 二ツ一度一ツ作る二ツ一度終には二ツ一度になさず表
 二ツと編む以下皆同じ(第七)皆表第八皆表にて五分の長
 さに引き出たを編むべし終迄同じ(第九)始の目三ツを編
 まずに其の目の中より其の先の目三ツをすくひ編みて
 後前の目三ツを編む時は三ツ宛つ絲を組みたる如くな
 るなり此の側の終り迄皆斯の如く編み行く(第十)皆表(第
 十一)は(第六)に同じ(第十二)第十三は皆表(第十四)は(第八)に

同じ(第十五)は(第九)に同じ(第十六)は(第十)に同じ以下目的の丈に達する迄(第八)(第九)(第十)を繰り返へ編み行きて終に至れば(第六)より(第一)迄編みて止める次に節を付ける糸を壹尺位に切りて兩端の目毎に一縷宛つ結び附け而して圖の如く結ぶなり



第十九章

鎖編 應用(鈎針大)

第一 春季用肩掛

用絲アイヌウール三球

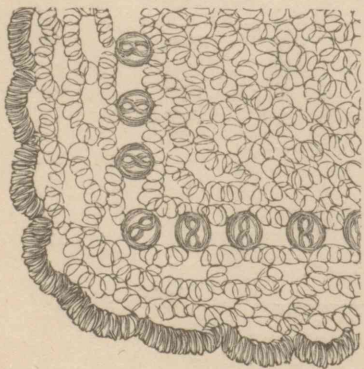
一、編方

先づ始に鎖四ツを編み是を輪と爲して又鎖三ツをなす次の目に小編にて附ける又鎖三ツ編みて次の目に小編にて附ける斯く四度なす時は圖の如く四角になるなり又鎖三ツ編みて前の三ツ編みたる鎖の中の目に編み附ける又鎖三ツ編みて同じ處に附ける即ち角の處に二度入れるなり又鎖三ツ爲して次の角に小編にて附けること前と同じに爲して一廻すべし次も又鎖三ツ編みて角と角との中央に附ける角は始終二度宛つ入れる斯の如

く角を附けつゝ變化なく編み行くこと用絲二た球を編み終る迄爲すべし而して一廻の終に鎖三ツ編みて長編を入れる是まで小編にて附けたる處に此の廻は皆同じ尤も角の處は二度宛つ入れるなり次の側は鎖三ツ編み針に絲を懸けて下の長編の間の三ツの目の中に針を入れて又絲を懸けること五度なして是を一ツに抜き出たせば球の形をなす又鎖三ツ編みて次の處に前と同じく球を作る此の側は皆斯の如く爲して終る其の次は始鎖三ツ編みて球の上の鎖目に長編を附ける又鎖三ツ爲て次の球の上に長編を附け行くこと此の側は皆同じに爲す其の先の側より三廻は鎖而已に小編にて附ける四廻目に鎖三ツ爲して長編にて附ける最終の側には

長編と長編の間の鎖に二度からけたる長編を七ツ入れる而して次の長編の間に小編にて附ける又次の處に長編七ツ入れて次に附ける斯の如く爲して終るなり圖の如し

但し此の用絲は毛質最も硬くして光澤あり極めて細しゆえに二綫を以つて巻きあるべければ其の二綫の儘にて編むべし又此の編方は絹絲又はジャケツなどの極細にて製するもよし



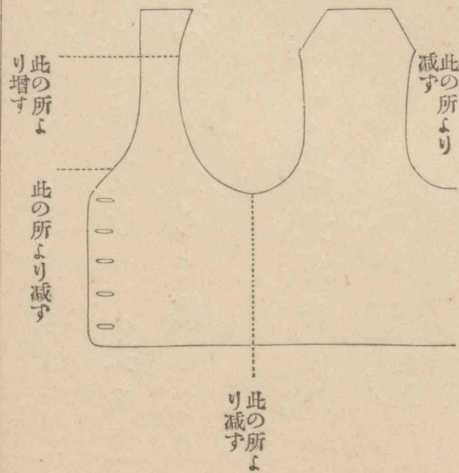
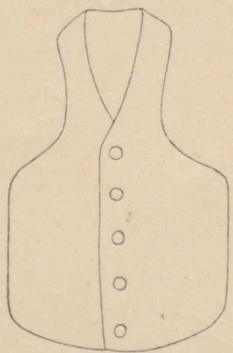
第二十章 小編應用(鈎針)

第一 チヨッキ下 用絲毛絲並太九オンス

一、普通出來上り寸法

丈 壹尺五寸 後巾 壹尺四寸 前巾 六寸五分
脊巾 八寸五分 衿肩 三寸

り上來出



二、編方順序

先づ二尺七寸の長さの鎖をなす是に小編を一ツ宛つ編み裏に返へし鎖を一ツ編みて夫に小編を爲す始の目を手前の方一縷に掛けて小編を爲し次の目は向ふの糸一縷に掛けて編む斯の如く互違に向ふの側と手前の側とを編み行き又表に返し鎖を一ツ編みて終の目手前を編みたれば編始の目手前より始む前の側の如く編み行くこと二寸迄にて釦の穴を明ける其の明方は表より終の目五ツ残る迄編み更に鎖三ツ編みて下の目三ツ飛ばして残の目二ツを並に編む其の上壹寸五分編みて穴を明けること壹寸五分毎に五度即ち穴五ツ明きたれば前巾而已を編む圖に示す如く釦穴の明きたる方より脇の方

へ六寸五分迄編みて鎖一ツ爲さずして目一ツ減じたる
 なり即ち第三の減方前の方へ編み行き又裏に返へ鎖
 一ツを編みて脇の方へ編み行き終の目二ツ残して鎖を
 爲さず又前の方へ編む斯く減じつゝ編み行きて前の方
 下より九寸と爲りたれば又前の方にて減す此の減方
 は目一ツ残して鎖一ツ爲さずに巾二寸五分となる迄兩
 端にて減す而して下の方より壹尺四寸となる迄は増減
 を爲さずに編みて圖の如く肩の處にて増す其の増方は
 編終の粒々を編み(即ち第三増方)て増す此の巾三寸に爲
 りたれば止める下前の方も上前と同様の増減にて編む
 (尤も釦の穴は無しに)夫より後の方を編むなり上前を右
 になして裏より編始目を残さずに編み終りて表に返へ

し鎖を爲さず編み行きて終の目二ツ残して鎖を爲さず
 編み行く前の脇を減じたと同じくなして脊巾八寸と
 なる迄減じ下より壹尺四寸となる迄は増減を爲さずに
 編みて此の巾三寸となる迄圖の如く兩脇にて減じて合
 はす而して縁を小編にて一廻編みて終る夫より裏に返
 へして輪編をなす下の方より編み始め小編の目一ツ毎
 に五分位の長さに引き出たして抜出たしに爲し終に至
 らば糸を切りて又始より爲すこと一段宛つ編み行く釦
 穴は絹糸にて膝るなり

注意此の寸法は普通の物として示したれば其の人々
 に依りて多少の差あり又仕立ての恰好にも因るべけ
 れば其の人に適する様なさんには先づ其の實物の寸

を取り丈巾たけば共に惣躰より五分宛つを減じて圖を描き
夫に合せて増減を爲すべし

第二十一章 裏編應用(玉附棒針十二番)

第一 木の葉形涎掛 用絲毛絲中細又は極(極細なれば二綫)細一オンス目數四十にて編む

一、編方

- (第一)一ツ取る 表一ツ 二ツ作る 二ツ一度 二ツ一
度 表二十五 二ツ作る 二ツ一度 二ツ一度 二ツ
作る 二ツ一度 二ツ作る 二ツ一度 表一ツ
(第二)表三ツ 裏一ツ 表二ツ 裏一ツ 表三ツ 裏一
ツ 表二十八 裏一ツ 表二ツ
(第三)一ツ取る 表三十六 二ツ作る 二ツ一度 二ツ

- 作る 二ツ一度 表一ツ
(第四)表三ツ 裏一ツ 表二ツ 裏一ツ 表三十七
(第五)一ツ取る 表一ツ 二ツ作る 二ツ一度 二ツ一
度 表二十五 二ツ作る 二ツ一度 二ツ一度 表四
ツ 二ツ作る 二ツ一度 二ツ作る 二ツ一度 表一
ツ
(第六)表三ツ 裏一ツ 表二ツ 裏一ツ 表七ツ 裏一
ツ 表二十八 裏一ツ 表二ツ
(第七)一ツ取る 表四十 二ツ作る 二ツ一度 二ツ作
る 二ツ一度 表一ツ
(第八)表三ツ 裏一ツ 表二ツ 裏一ツ 表四十一
(第九)一ツ取る 表一ツ 二ツ作る 二ツ一度 二ツ一

度 表二十五 二ツ作る 二ツ一度 二ツ一度 表八
 ツ 二ツ作る 二ツ一度 二ツ作る 二ツ一度 表一
 ツ
 (第十)表三ツ 裏一ツ 表二ツ 裏一ツ 表十一 裏一
 ツ 表二十八 裏一ツ 表二ツ
 (第十一)一ツ取る 皆表
 (第十二)十止める 表三十九
 (第十三)は(第一)に同じ
 (第十四)表三ツ 裏一ツ 表二ツ 裏一ツ 表三ツ 裏
 一ツ 表六ツ(此の處左の針に残りたる目は其の儘にて
 裏に返へして右の針にて第十五を編み行く第十六第十
 八第二十第二十二と斯の如くなして第二十四にて編み

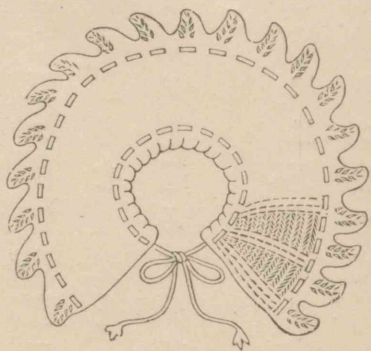
終るなり)

(第十五)一ツ取る 裏五ツ 表六ツ 二ツ作る 二ツ一
 度 二ツ作る 二ツ一度 表一ツ
 (第十六)表三ツ 裏一ツ 表二ツ 裏一ツ 表十七
 (第十七)一ツ取る 裏十 一ツ作る 二ツ一度 二ツ一
 度 表四ツ 二ツ作る 二ツ一度 二ツ作る 二ツ一
 度 表一ツ
 (第十八)表三ツ 裏一ツ 表二ツ 裏一ツ 表七ツ 裏
 一ツ 表十六
 (第十九)一ツ取る 裏十五 表十 二ツ作る 二ツ一度
 二ツ作る 二ツ一度 表一ツ
 (第二十)表三ツ 裏一ツ 表二ツ 裏一ツ 表三十一

(第二十一)一ツ取る 裏二十 一ツ作る 二ツ一度 二
 ツ一度 表八ツ 二ツ作る 二ツ一度 二ツ作る 二
 ツ一度 表一ツ
 (第二十二)表三ツ 裏一ツ 表二ツ 裏一ツ 表十一
 裏一ツ 表二十六

(第二十三)一ツ取る 裏二十五 表十九
 (第二十四)十止める皆表

斯の如く第一より第二十四迄十一回繰り返へし編みて
 止める而して紐を附けるには飾絲又は毛絲にて七八寸
 程少し緩めに鎖編を爲して紐通の穴に千鳥掛けに爲
 して附け終に又七八寸位鎖を爲して總を附ける飾の方
 の穴にはリボンを通すなり



第二十二章

鎖編 長編 應用(鈎針)

第一 麻の葉形肩掛 用絲毛絲中細八オンス

一、編方

先づ二尺二三寸の長さに鎖を編みて針に掛りたる目の
 下より四ツ目に長編を入れる此の長編は普通の如く二

度に出たさず一度針を抜き出たせば針に糸の二ツ掛り
 居るに依り其の儘にて下の鎖を四ツ飛ばして五ツ目に
 前の如く一度抜き出たし長編を二ツ入れる此の時には
 針に糸の四ツ掛り居るなり夫を一度に抜出たして鎖を
 四ツ編み前と同じ長編を四ツ寄せて結びたる處に入れ
 直ぐ下の長編の二ツ入れある處に又二ツ入れて下の鎖
 を四ツ置きて五ツ目に長編二ツ入れる然する時は針に
 糸の六ツ掛り居るなり夫を一度に抜き出たし結びて又
 前の如く鎖四ツを編みて長編を爲し行くこと此の側の
 終迄皆同じ

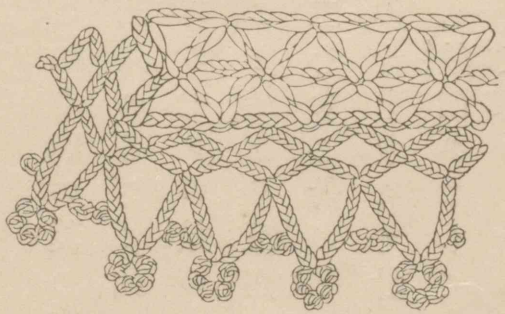
但し始と終には毎側四ツ宛つを抜き出たし結びて裏
 に返へし鎖四ツ爲して前の如く結びたる處に長編を

二、飾の附方

入れて編み(左圖参照)行き四角になりたれば飾を付け
 る

飾の附け方は鎖七ツ編みて圖の如く麻の葉の高き處に
 小編にて附ける角の處には二度入れること此の側の終
 る迄皆同じ次は鎖七ツ編みて前の七ツの鎖の中の目に
 小編にて附ける斯の如く編むこと始より五廻なす終の
 側は角を附けずに編みて鎖十二をなし針の下より四ツ
 目に針を通して抜き出たし又鎖十をなして針の下より
 四ツ目に針を入れて抜き出たし鎖四ツなして其の元に
 針を通して抜き出たし斯の如く五度なす時は五ツの球
 が出来る即ち花の形となるなり夫より鎖十を編み針の

下より四ツ目に針を通して抜き出た鎖八ツ爲して下の七ツの鎖の中に小編にて附る又鎖十二をなして針を抜き前になし置たる小き球形の中に針を入れて左に編みたる鎖の先に針を通し抜き出た鎖二ツを編み三ツ目の鎖に針を入れて抜き出た鎖又鎖十を編みて前の如く花形を作り次に鎖十を爲して小き球形を作り又鎖八ツを編みて下の七ツの鎖の中に今一度附ける斯の如く連続爲して編み行くこと



一廻にて終るなり

第二十三章 小編應用鐵製鈎針

第一 矢筈形帶締 用絲絹絲四匁

一、模様編出方

編出た方先づ地と爲すべき絲を以つて鎖二十を編み輪となして是に小編を編み行くこと三側夫より圖の如く矢筈形を編み出た丈三尺五寸に成りたれば變色の絲を切り地色にて三廻編みて止める兩端には目毎に三綫位宛つ地色の絲を通し一寸位に切り揃へて總となす尤も金具を附くれは猶よとす但し模様は片側のみにして裏は無地なり

五ッ宛つ爲して七寶形の角の處に小編にて附け行くなり次は此の鎖目に一廻長編を成す(下の方は除きて)其の長編の上に鎖五ッ宛つ爲して長編三ッ飛ばして四ッ目に小編にて附ける猶一側五ッの鎖を爲して下の鎖の中に附ける斯の如く終迄編みて直ちに鎖を五ッ編み次の五ッの鎖の中の目に小編にて附ける又鎖五ッ編みて針を抜き放なし右方の五ッの鎖の中の目に針を通し今爲したる鎖を抜き出たして又五ッの鎖を編み出たし今の鎖の中の目に小編にて附ける而して鎖三ッを編み次の五ッの處に附ける又鎖五ッ編みて針を抜き放なし下の三ッの鎖の右の端の目に針を通し今爲したる鎖を抜き出たし又五ッ鎖を爲して前の如く鎖五ッの中の目に附

けて三ッ鎖を爲し次の五ッの中に附ける斯の如く爲すこと終迄同じ是にて飾は附け終り而して仕上げを爲すに霧を吹きて恰好を正し押を掛けて裏布を附け合せるなり心には西の内紙を丈巾とも能く寸法を取り圖の如く裁ちて(飾を除き)長編の處迄能く揉みて鏝を掛け置き用布を此の紙より二分位丈巾とも長目に裁ちて(此の用布は甲斐絹又は金巾更紗の類)紙の周圍に一分程糊を附け廻し是を用布の上に置きて用布の周圍に鏝を入れて是に貼置ける又同じ物を一枚作りて附け合せ裏の方に同色の絹糸を以て纏ひ附け圖の如く折りて兩端を毛糸にて一針抜きに附ける夫より紐を附けて終るなり

(第二)表九ツ、裏二ツ斯の如く一廻皆同じ

(第三)は第二に同じ

(第四)三ツ一度一ツ作る表一ツ 一ツ作る表一ツ 一ツ作る表一ツ 一ツ取る 二ツ一度 其の上の掛る 裏二ツ

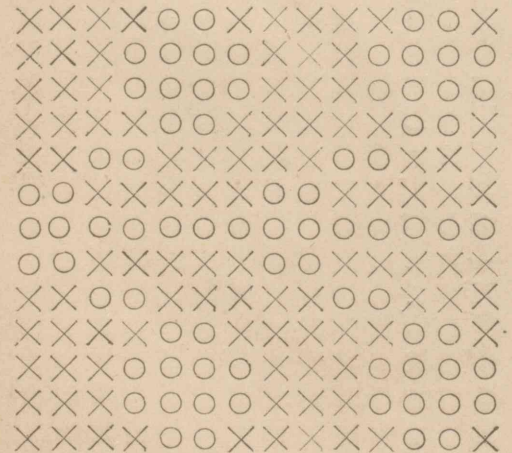
(第五)は第二に同じ以下第二第三第四を繰返へし編こと三寸迄(藤編)の所にて目數二ツ殖居るがゆへに終の一廻にて元の七ツに減す(夫より平編に爲して)表目而已別色の絲(絹絲又は毛絲)にて藤の花形を編み出たす下に記したる一圖の如く爲して編むべし

三、 拇指増方

拇指の増方は圖の如く編み終らば別色の絲を切りて地

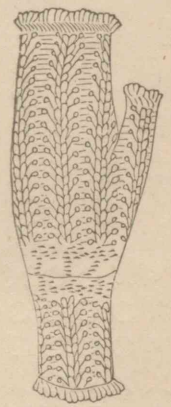
色の絲にて表目に一廻編みて終に針と針の間の絲を左の手の針に掛け右の手の針にて捻りて編み表目七ツ編みて又目と目の間を取り前同様に増して裏目二ツ編み是より藤編をなす尤も下より筋を通して藤編四個所裏編五個所を編み(手の甲)となるべき分残り二十五は皆表目に編む其の上一廻編みて(藤形の處は其の編方を續けて)前に増したる目の外にて増し行くこと一廻置きに九

第一圖 ○印は變り色 ×印は地色



度爲して夫より増減を爲さずに七分編む

り上來出



四、拇指作方

拇指の作方は前に増したる所の目二十五を針に置き
他の目を残らず糸に移し取りて針にある二十五の目に
新たに四ツの目を掛け是を三本の針に分ち二廻編みて
新たに掛けたる目の手前の目を一ツ取り表一ツ編みて
取りたる目を其の上に掛ける表二ツ編み二ツ一度を爲
して他は皆並に編む其の上一廻編みて前に減じたる所

に至れば一ツ取る表一ツ其の上に掛ける二ツ一度是に
て新たに掛けたる目は皆減じたるなり而して指勝より
一寸迄編みて一ツ作る二ツ一度以下皆同じく三廻編み
て止める次に節を附ける鈎針にて止めたる目の上に小
編を二ツ續けて編み又鎖五ツ爲して針を抜き小編の向
ふの目一綫に針を通し前に爲したる鎖の先に針を通し
抜き出たし球形を作り目を一ツ置きて附けること一廻
同じく爲して終に糸を切り止め針にて裏の方をすくひ
て止める

五、指勝すくひ方

指勝のすくひ方は新たに糸を掛けて増したる所にて穴
の明かざる様八ツの目をすくひ取り(手前の目の裏の方

に絲を結び附けて兩端は捻りて編む前に絲に取り置き
 たる目を残らず針に移しとり二廻は並に編みて藤形の
 所は依然其の編方を續けて三廻目に指勝をすくひたる
 八ツの目の右の端を一ツ取る表一ツ編み其の上に掛け
 る表四ツ編み左の端にて二ツ一度と爲し他は皆並に編
 みて其の次の側は増減を爲さず一廻編み次の側にて前
 に減じたる所即ち六ツの目の兩端を前と同じく減ず夫
 より増減を爲さずに勝より二寸編みて拇指と同じく一
 ツ作る二ツ一度の編方にて三廻編みて拇指の如く飾を
 附けるなり

第二十六章 表編 裏編 應用(棒針)

第一 木の葉連續編貨幣袋

用絲絹絲二匁
目數六十四

一、編方

- (第一)表一ツ 一ツ作る 表一ツ 一ツ作る 表三ツ
- 二ツ一度 裏一ツ(以下第號毎に一廻は皆同じ)
- (第二)表六ツ 二ツ一度 裏一ツ
- (第三)表二ツ 一ツ作る 表一ツ 一ツ作る 表二ツ
- 二ツ一度 裏一ツ
- (第四)は第二に同じ
- (第五)表三ツ 一ツ作る 表一ツ 一ツ作る 表一ツ
- 二ツ一度 裏一ツ
- (第六)は第二に同じ
- (第七)表四ツ 一ツ作る 表一ツ 一ツ作る 二ツ一度
- 裏一ツ

(第八)は第二に同じ夫よりは第一より第八迄七度繰り返へし編みて底を減ずるなり其の減方は

(第一)一ツ取る 表一ツ其の上に掛ける 一ツ作る 表一ツ
一ツ作る 表二ツ 二ツ一度 裏一ツ

(第二)表五ツ 二ツ一度 裏一ツ
(第三)一ツ取る 表一ツ 其の上に掛ける 一ツ作る

表一ツ 一ツ作る 表一ツ 二ツ一度 裏一ツ
(第四)表四ツ 二ツ一度 裏一ツ

(第五)一ツ取る 表一ツ 其の上に掛ける 一ツ作る
表一ツ 一ツ作る 二ツ一度 裏一ツ

(第六)一ツ取る 表一ツ 其の上に掛ける 表一ツ 二ツ一度 裏一ツ

(第七)一ツ取る 二ツ一度 其の上に掛ける 裏一ツ是にて減じ終りたるなり夫より絲を四寸程に切りて此の十六の目を絲に通し丸く締め裏に返へして止めるなり

二、飾附方

飾の附方は口の方へ鈎針にて編み附け五ツの鎖を爲して下の目を三ツ飛ばして小編にて附け又鎖五ツ爲して四ツ目に附ける斯の如く爲すこと一廻夫より直ちに鎖五ツ編み而して下の五ツの鎖の中に附けること二廻爲して次は先づ五ツの鎖の中に鈎針を通し絲を膝け又通しては絲を膝けること五度なして結ぶ爾する時は球形を爲す而して鎖三ツ編みて又同じ處に前の如く球形

を作ること一ツ所に四ツ入れる次の五ツの鎖の中に小
編にて付け又針に糸を膝けて其の先の鎖の中に丸き花
の形を作ることに前と同様に爲す此の一廻は皆同じく爲
して終る夫より紐を作りて下の鎖の中に通すべし

第二十七章 補綴方

第一 縦補綴、横補綴、掛合

一、靴下繕方

靴下の繕方は先づ其の損じたる場所の最も弱り居る糸
の部分徐徐と解し行きて稍健全なる所に至れば圖の
如く四角に目を揃へ裏にて糸を能く止め更に糸を針に
通して是に掛け小茶碗を其の中に入れて是を仰向きに爲

して外より握り持ちて綴り行くこと最も便宜なりとす
圖の如し

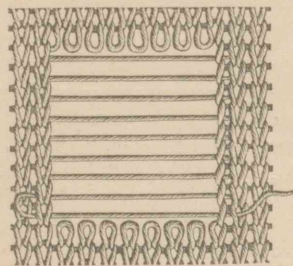
縦補綴

横補綴

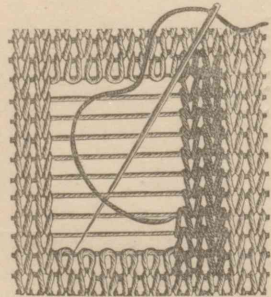
掛

合

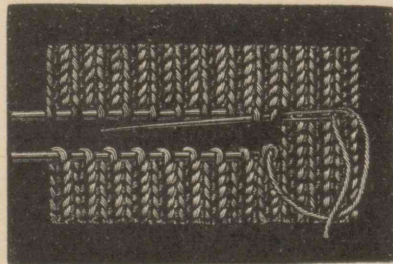
方掛の糸



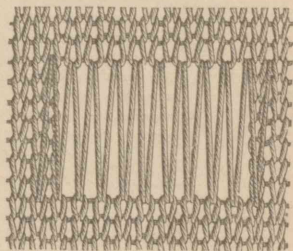
綴補縦



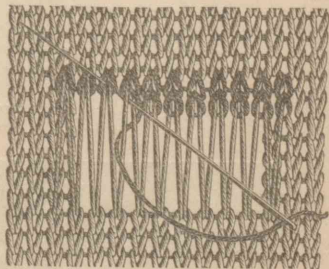
せ合掛



方掛の絲



綴補横



第二十八章 保存洗濯廢絲の利用方

第一 保存方

一、總て毛絲製のものは使用の後保存方に注意せざる時は
悪しき蟲を生じ易ければ常に是が注意を要せざるべか
らず然れば是を保存するには先づ其の入れ物を最も清
潔ならしめ其の物品を入るゝに當りては一品毎に白紙

を隔たて入れ其の間に樟腦などの防蟲劑を紙包に爲し
て入れ成るべく透きの明かざるやう叮嚀に蓋を爲し置
くべし而して春季より夏季にかけては折りく取り出
し風を通して蟲を豫防すべきこと必要なり

第二 洗濯方

一、毛絲を以て製したるものを洗濯するには先づ適宜の鹽
に微温湯を入れて品物を能く浸し置き一時間程經たる
後板の上にて延ばし刷毛(ブラシ)に石鹼を附けて不同な
きやう一鉢に軽く擦り充分垢の落ちたる時は清水にて
叮嚀に濯ぎ緩く絞りに竿に掛け日蔭に干すべし又毛絲
の類は強き冷熱に逢ふ時は甚たく縮まるものなれば
是を濯ぐに井戸水を用ふるときは夏季は汲置を用ひ冬

季には汲立を良とす然れども若し水質硬水なれば微温湯と爲して用ふべきなり

第三 廢絲利用方

一、毛絲にて編みたる物は何品に依らず破損甚たしくして使用に堪へ難きものは其の損せし個所を切り捨て絲の健全なる所を解き取り拵に掛けて湯通を爲し其の縮まりを延ばす時は再び使用する事を得るなり又湯通を爲す手數ずを省きて二時間乃至三時間程盥に入れて水に浸し置き絞らずして是を竿に掛け錘を下げて日蔭にて乾かすべし尤も一旦使用せし絲なれば多少染色及び彈力等も自から減じ居ること當然なれば是を利用するには多く外部に出でざる所に廻してなるべく彈力を要せ

ざる部分に使用す假令は腹掛腹卷などの類殊とに靴下の如きは踵を減じ終りたる處より爪先を減じ始むる所迄の間即ち土踏すの部分に使用するなど最も良法なりと云ふべし

附録

第一章

表編 裏編 應用(棒針)

第一

洋袴下

用絲毛絲並太十三オンス目數六十八總丈三尺壹寸脰下一尺八寸

部分編

一、口編方

口の編方は表一ツ 裏一ツの護謨編を爲すべし

二、腓腸増方

腓腸の増方は一廻の終に目を一ツ残る迄編みて其の目と目の間の絲を左の針にすくひ掛け右の針にて捻りて編む(第一増方)次の針にて一ツ編みて又右と同じに増す他は皆並に編むこと七廻爲して八廻目に又同じ處にて

増す斯の如く増し行くこと八廻毎に十五度爲す

三、股増方

股の増方は腓腸の増方と同様にして六廻毎に二十一度増したる後ち後の部而已にて増し行くこと二十一度(片方にて)増す此の増方にて左右の別を附ける所なれば注意すべし

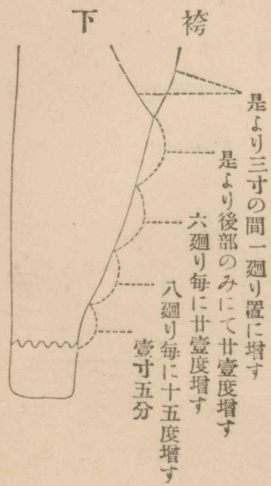
四、胯増方

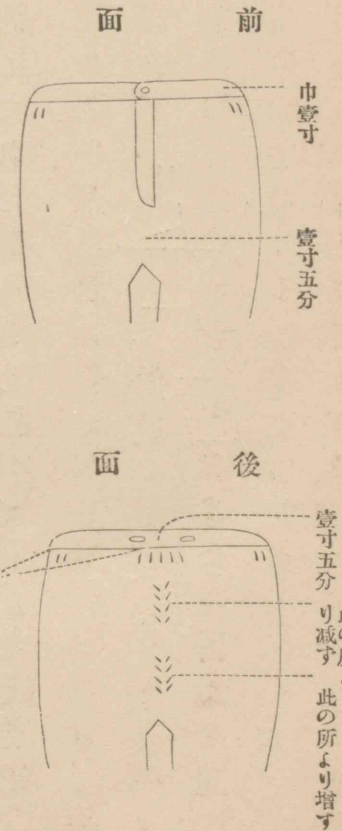
胯の増方は前に増終たる針と針の間をすくひて一ツ増し其の上の側は並に編み其の次に今増したる目の兩脇にて三寸になる迄一廻置きに圖の如く増す斯の如く編みて兩脚共に出來たれば其の増したる三角形になり居る所を兩脚の分を掛け合す合せ方は靴下の爪先を合せ

ると同一なり而して兩脚共一ツに爲して轉々と編み廻り(胯)の處は前後共穴の明かざる様三ツ宛つ目をすくひて壹寸五分の深さに爲りたれば前の方を開きて編む後の方に至れば(左圖)を見るべし三ツ宛つすくひたる目の兩方にて増すこと六廻毎に六度夫より増減を爲さずに壹寸五分編みて前に増したる所にて八廻毎に九度減す下の分けたる所より丈八寸となりたれば腰の兩脇にて十二宛つ減じ後の方にて十五減す(左圖)を見よ其の減じ方は何れも二ツ一度になら表一ツして又二ツ一度を爲すなり尤も前明を附けるには襯衣の衿を附けると同じに爲すべし又腹卷を附ける時も同様なり

五、編方順序

編方の順序は下より編始む口護謨編二寸五分編みて平編壹寸五分を編み夫より部分編の如く腓腸より股と順に増し行きて下より壹尺八寸となりたれば胯を増して兩脚を掛け合せ轉々と丸く編み廻り胯の處より壹寸五分編みて前の方より分けて表よりは表目を編み又裏に返へして裏目を編み行き後の方にて増減を爲し其の丈に達したれば前明きを附けて後腹卷を附けるなり





第二 手袋(男物)
用絲毛絲中細二オンス
目數七十二

部分編

一、口編方

口の編方は皆表にて三廻編み四廻目は一ツ作る 二ツ一度一廻皆同じ五廻目より又皆表にて三廻編みて後最初

針に掛けたる目を他の針にすくひ取りて其の針を向ふに廻はして今編みつゝある目と合せて編む此の一廻は皆同じ爾する時は袋の如くなるなり六廻目よりは表二ツ裏二ツの護謨編三寸迄を爲すべし

二、手頸増方

手頸の増方は皆表にて四分編み此の四分の處にて圖の如く四ツ増す(第一増方)其の増方は一廻の針の終にて目と目の間を左の針に掛け右の針にて捻りて編む他は皆並に編みて其の次の側にて今増したる目の手前にて増す斯の如く増すこと一廻置きに四度爲す此の増方にて左右の別を附ける所なれば注意すべし 但し此の増方は左なり又右を作るには増したる目の

先へくと増し行くなり

三、 拇指増方

拇指の増方は手頸を増し終りたる目より三十六迄編みて増し始む其の増方は目と目の間を取り一ツ増して並に四ツ編み又一ツ増し他は皆並に編み一廻置に増すと十二回増したる目の外にて圖の如く増し行く夫より増減を爲さずに七分編むべし

四、 拇指作方

拇指の作り方は前に増したる所の目二十八を針に掛け置き残りの目を皆糸に移して其の針に取り置き二十人の目に新たに四ツの目を掛けて夫を三本の針に分け二廻編みて新たに掛けたる目の手前の目を一ツ取り表

一ツして其の上の掛ける表二ツ、二ツ一度を爲して他は皆表其の上一廻は皆表に編みて次に今減じたる所に一ツ取る表一ツ其の上の掛ける二ツ一度是にて新たに掛けたる四ツの目は皆減じたるなり而して胯の際より壹寸六分迄編みて指先を減ずるなり

五、 指先減方

指先の減方は一廻に五ツ宛つ一廻置きに三度減ず(第一減方)即ち二ツ一度表三ツ、二ツ一度と一廻に五度爲し其の上は皆表に編みて又前の如く二ツ一度表二ツと減じ行く終に十三と成りたれば五寸位に糸を切り十三の目を皆此の糸に通して締め針に通して其の處に針を入れ裏に返へして壹寸位目をすくひ返へして止める

六、指勝ゆびまたすくひ方

指勝ゆびまたのすくひ方は新たに糸を掛けて増したる所にて穴の明かざる様八ツの目をすくひ取りて(手前てまへの目の裏の方に糸を結び附けて)前まへに糸に取り置きたる目を残らず針に移し取りて二廻並に編み三廻目みまはりに今すくひ取りたる八ツの目の右の端を一ツ取る表一ツ其の上うへに掛ける(第二減方表四ツ、二ツ一度第一減方)他は皆並に編む其の上は増減を爲さず一廻編みて次に今減じたる所の上にて前と同様に二ツ減す夫より勝の際より七分になる迄並に編む而して小指を附ける

七、小指附方

小指の附方は拇指の勝を減じたる所の中央より二ツに

折りて中心となし小指の目數丈(即ち二十)を針に残し置き是に拇指と同様新たに目を四ツ掛けて増し他の目は残らず糸に通し置きて針に掛けある二十四の目を三本の針に分け拇指と同じく二廻編みて新たに増したる目を減す指先の減方も同様なり夫より拇指同様勝を八ツすくひて後糸に移しある目を皆針に取りて二廻並に編み八ツのすくひ目の兩端にて拇指と同じに爲して減す而して勝の際より一寸七分迄編みて指先を減するなり夫より無名指を作る

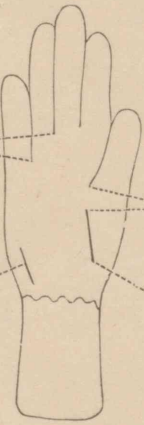
八、無名指、人指、中指作り方

無名指の作方は勝を減じたる所の中央より兩方へ目を十一宛つ針に取りて夫に新たに目を二ツ掛け二十四と

爲して二寸三分迄編みて指先を減ず次に人指を作る總
 て無名指と同じく爲す其の次に中指を作る此の所にて
 残の目十六となるに因り中指の目數には不足なり然る
 に此の兩方にて六ツ宛つの目をすくひ取るがゆえに十
 二の目を増す然れば指の目數より四ツの目を超過する
 も其の儘にて二廻編みて膝の兩脇四個所にて目數二十
 四となる迄減じ二寸五分となりたれば指先を減じて終
 るなり

普通出來上り寸法左の如し
 指の目數 指の丈
 拇指 二十八 壹寸九分
 人指 二十四 二寸五分

中指 二十四 二寸八分
 無名指 二十四 二寸五分
 小指 二十 壹寸九分



此の間四分

此の間七分

此の間七分

此の所一廻り置に十二回増す

此の所一廻り置に四つ増す

第三 手袋(女物)用絲毛絲中細二オンス

一、普通出來上り寸法

指の目數 指の丈
 拇指 二十六 壹寸七分

人指	二寸二分	二寸三分
中指	二寸二分	二寸六分
無名指	二寸二分	二寸三分
小指	一寸八分	壹寸七分

但し右の外何れも皆男物に同じ口護謨編は他の編方に爲すもよし

附 録 終



明治三十八年一月二十八日印刷
明治三十八年一月三十一日發行
明治三十九年二月十六日修正再版印刷
明治三十九年二月十九日修正再版發行
明治四十二年十二月一日三版印刷發行



著作兼 發行所	東京市麴町區三番町十四番地 森本
發行所	東京市麴町區下六番町十七番地 松澤 三
印刷所	東京市麴町區下六番町十七番地 勞 舍

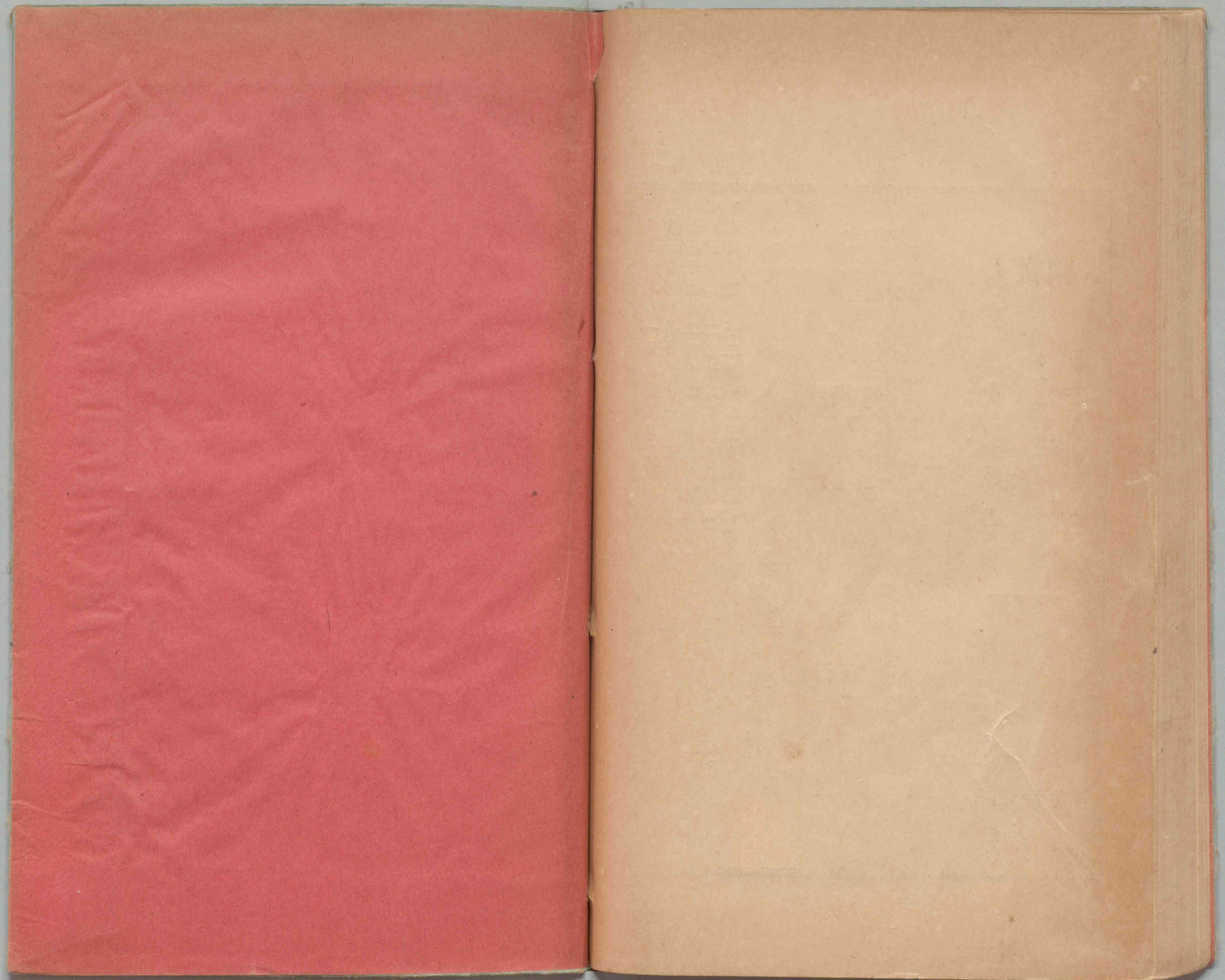
(編物教科書)
正價金五十五錢

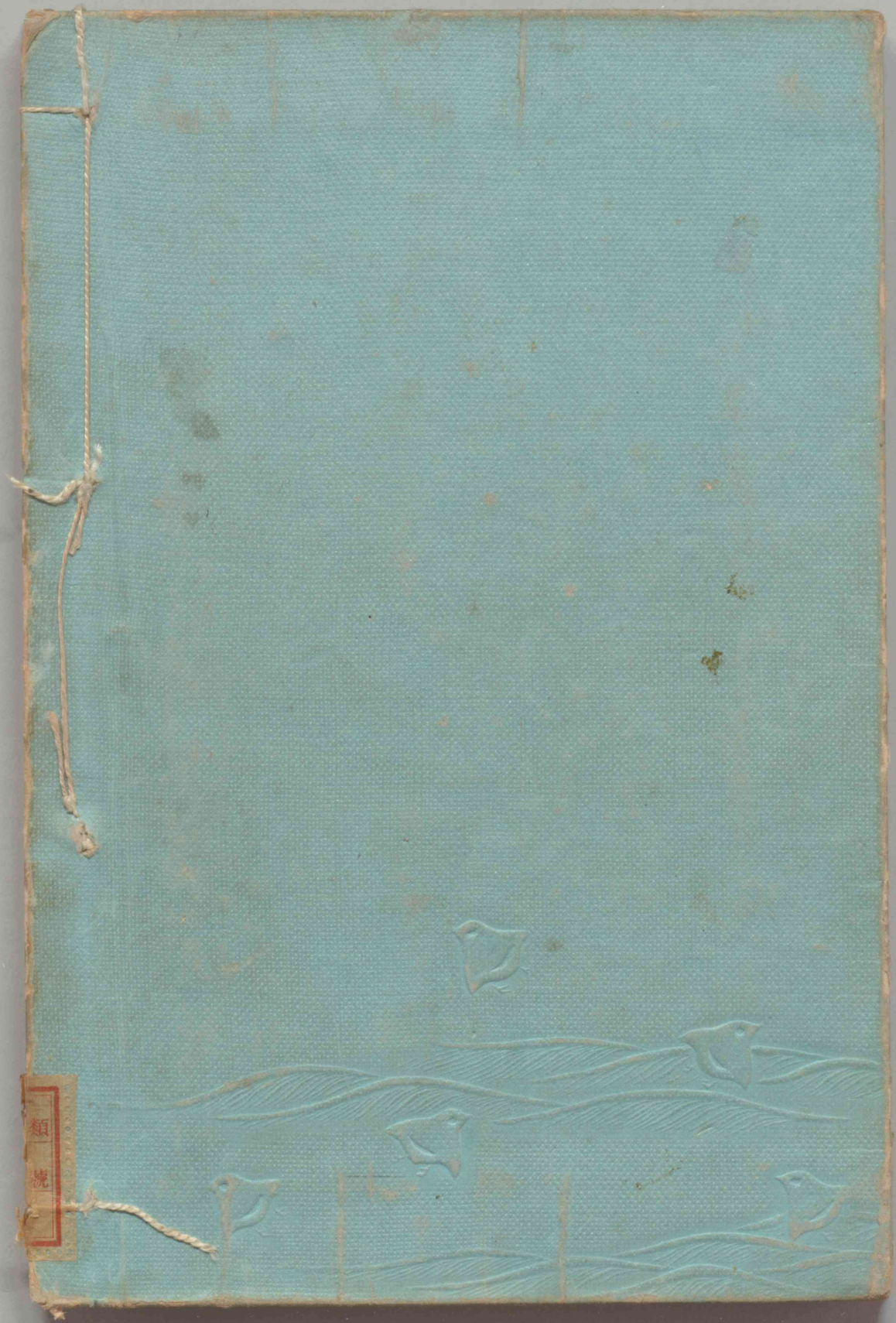


大 賣 捌

東京市神田區表神保町二番地
中西屋書店
電話本局長四一〇番
東京市日本橋區通一丁目十九番地
大倉書店
電話本局四一四番

東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
警醒社書店
電話新橋一五八七番
神戸市北長狹通六丁目七十六番地
福音社書店





類
統